

「十字架につけられた王」

詩 篇 第22篇1節～10節
マタイによる福音書 第27章32節～44節

説 教 村上修平牧師

主イエスが十字架につけられた時、兵士達はくじを引いて主イエスの着物を分けました。また、「これはユダヤ人の王イエス」（マタイによる福音書27章37節）と書いた罪状書きを頭の上の方に掲げました。彼らは主イエスを「ユダヤ人の王」であると本当に信じたわけではなく、ユダヤ人の王を名乗った者が十字架上でみじめな姿をさらしているのを面白可笑しくからかったのです。兵士達は前の晩も、主イエスにいららの冠をかぶらせ、右の手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、ばんざい」（29節）と言って、馬鹿にしました。

そして、そこを通りかかった群衆も、頭を振りながら（人を侮辱する仕草）、イエスを罵って、「…もし神の子なら、自分を救え、そして、十字架からおりてこい」（40節）と叫びました。同じように、祭司長や律法学者、長老達も、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」（42節）と言って、主イエスを馬鹿にしました。さらに、一緒に十字架につけられた強盗達までも、同じようにイエスを罵りました。主イエスは、皆から散々罵られ、ついには強盗からも馬鹿にされて、人としての尊厳さえ認められない、最も低い所にまで落とされたのです。こうして見ますと、主イエスのご受難は決して格好の良いものではなかったことが分かります。周りの人から賞賛されることもなく、むしろ、みじめな犯罪者として、徹底的に馬鹿にされて、最低の死に方をして死んでいったのです。

主イエスは、神の子だから苦しみを受けても平気だったのでしょか？そうではないと思います。主イエスは、確かに神の子でありましたが、真の人間でもありました。鞭で打たれたら傷がつき、釘を打たれたら、当然、血が流れたのです。主イエスは十字架の上で、その体も魂も、深く傷ついたらろうと思います。けれども、主イエスは、どんなに馬鹿にされても、傷つけられても、その苦しみにじっと耐えました。それは、人々をそれでも深く愛しておられたからです。主イエスは、私達を救い出すためならば、どんな恥も苦しみも引き受けて下さる、それほどに私達のことを大事に思っておられるのです。

主イエスの《受難》を英語では、“the Pas-

sion”と言います。この英語の“passion”には、《情熱》という意味もあります。主イエスの《受難》には、主イエスの《情熱》が溢れています。主イエスは、神様から離れて迷っている人をご覧になると、はらわたがちぎれるような憐れみを覚えると、聖書に書いてあります。『この人が神の愛を知ることができれば、私は喜んで自分の命を捨てる！』。主イエスは、燃えるような情熱をもって私達を愛されたので、十字架の苦しみまで引き受けて下さったのです。

さて、「ユダヤ人の王イエス」という罪状書きですが、皆さんは「王」と聞くと、一国の主、君主、その国で一番偉い人、などのイメージを持たれるかもしれませんが、しかし、聖書に記された「王」は、ある目的のために、神に選ばれた者であり、神と人々に《仕える僕》としてのリーダーなのです。そして、リーダーには、時には苦しみをも引き受けることが求められます。主イエスも、「ユダヤ人の王」として父なる神に選ばれ、そのために、十字架につけられることにならざるを得ませんでした。主イエスは、『こんな苦しい役目はもう嫌だ！』と、早々に十字架から降りることも出来たはずですが、しかし、主イエスは最後までユダヤ人の王、仕えるリーダーとしても役目を果たされました。

主イエスは、父なる神を心から愛しておられたので、ご自分を選んで下さった父の信頼に応えたかったのです。そして、もう一つの理由は、人々を愛する深い《情熱》です。今日礼拝の中で、教会役員の仕事と教会学校教師・文庫担当者の仕事が行われます。神様によってこれらの務めに選ばれた方々にお勧めします。どうぞ、仕えるリーダーになって下さい。それは、苦しみを引き受けることでもありますが、苦しみの向こうに大きな実りと喜びが待っていることを信じて下さい。そして、今日仕事を受けてなくても、全てのクリスチャンは、王として祭司として神様に選ばれていることを覚えて頂きたいと思えます。家庭や職場や地域で、仕えるリーダーになって下さい。主イエスが共におられ、必要な《情熱》を、必ず与えて下さいますから、大丈夫です。

（記 村上修平）